頼るのは壁か水か　　2017 03 19

ヨハネ4:5-42 安達均

主の恵みと平安が豊かにありますように！

本日の福音書はたいへん長かった。 長かったために、良き知らせは、説教は短くなる。

短い説教のなかではあるが、ちょっと、水というものについて考えて欲しい。水というとどういう印象を持っておられるだろうか。　洗礼は、三位一体の神の名のもとに霊と水によって受ける。水が怖いという印象を持たれる方？

洗礼は、ローマ６章によると、死と復活だ。わたしたちが一度死ぬが、イエスの信仰により、イエスが復活したように、洗礼の瞬間から私たちも復活の命に生きる。　マルチンルーターは、洗礼の際は、じゃぼんと水につかり、一時的に息ができなくなる洗礼をすすめている。　そう、水は私は怖いものだと思う。

創世記には、ノアの箱舟のストーリーに大洪水が出てくる。　3月11日は、東日本大震災６周年だったが、津波への畏れを世界中の人に知らしめた。　しかし、同時に水は、命の源だ。　現代の科学者は、月や火星に生物がいるとすれば、水があるかどうかが、鍵だという。

水をテーマに、今日の福音書では、イエスとサマリア人の話がはじまっている。　長いストーリの中に、私はいくつかの壁を見る思いがある。　あきらかなのは、まずサマリア人とユダヤ人の壁がはっきり浮き彫りにされている。

さらに、当時の社会情勢からして、男性と女性が公衆の面前で話すということも本来は適切ではなかったのだと思う。弟子たちが買い物から帰ってきたときに、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。というくだりがある。つまり通常なら男性と女性の間の壁があった。

さらに、何回も離婚をしていたサマリア人女性は、人目を避けて、わざと昼間に水を汲みに出かけている。　つまりそこには、離婚を経験した女性が社会で生きる場合の、むずかしさ、離婚経験女性と地域社会の壁があったことがうかがえる。

しかし、イエスは女性との会話の中で、見事な生きる水、生命力の源になるような水を女性に与えているといえるのではないだろうか。　まず、イエスの方から女性にはなしかけている。

イエスが困っている人を助けるのではなく、逆に「水をください」といってイエスが助けてもらおうとする会話からはじまっている。　そこには、話しをかけてくれないような女性が話しかけられる、一人の市民として認められている恵みを感じないだろうか。イエスは最初からサマリアの女性に、命の水をそそぎかけていることを感じないだろうか？

また女性は、地域社会に向かって、この方こそ救い主かもしれませんといって、立派に語りかける存在になっている。　そして、サマリア人たちが、ユダヤ人であるイエスと弟子たちのところにやってきて、対話が成立している。

さきほどいった、男女の壁、離婚女性と社会の壁、またサマリア人とユダヤ人の壁が、とけていくという様相を伺えるのではないだろうか。　そこには物理的ではない水、イエスが源となって与えられる霊の水が、サマリア人のコミュニティに注がれていることを感じる。

この話しは、決して2000年前だけの話ではないのだと思う。社会にはいろいろな壁が作られる。みなさん一人ひとり思い浮かべて欲しい。それは自分の感情による壁だったり、家族の周りの壁だったりする。また地域社会に存在する壁もある。また教会の中にだって、人間の思いによって壁があったりする。

しかし、それらの壁に対して、霊と水によって洗礼を受け、イエスの愛がやどっているキリスト者たちによってその壁はくずされていく。イエスがサマリア人に、霊的な水を注ぎ、壁が崩されていったように、現代においても壁はくずされていく。どんな神の思いにかなわない壁が作られようが、イエスの注がれる水によって、くずされないものはない。　アーメン